

17.そこで、大祭司とその仲間たち全部、すなわちサドカイ派の者はみな、ねたみに燃えて立ち上がり、

18.使徒たちを捕え、留置場に入れた。

19.ところが、夜、主の使いが牢の戸を開き、彼らを連れ出し、

ἄγγελος δὲ κυρίου διὰ νυκτὸς ἀνοίξας τὰς θύρας τῆς φυλακῆς ἐξαγαγὼν τε αὐτοὺς εἶπεν,

20. 「行って宮の中に立ち、人々にこのいのちのことばを、ことごとく語りなさい。」と言った。

Πορεύεσθε καὶ σταθέντες λαλεῖτε ἐν τῷ ἱερῷ τῷ λαῷ πάντα τὰ ῥήματα τῆς ζωῆς ταύτης.

命 pr. pt.aor.pass. 命 pr.

21.彼らはこれを聞くと、夜明けごろ宮にはいって教え始めた。

一方、大祭司とその仲間たちは集まって来て、

議会とイスラエル人のすべての長老を召集し、使徒たちを引き出して来させるために、人を獄舎にやった。

22.ところが役人たちが行ってみると、牢の中には彼らがいなかったので、引き返してこう報告した。

23. 「獄舎は完全にしまっており、番人たちが戸口に立っていましたが、あけてみると、中にはだれもおりませんでした。」

24.宮の守衛長や祭司長たちは、このことばを聞いて、一体これはどうなって行くのかと使徒たちのことで当惑した。

25.そこへ、ある人がやって来て、

「大変です。あなたがたが牢に入れた人たちが、宮の中に立って、人々を教えています。」と告げた。

26.そこで、宮の守衛長は役人たちといっしょに出て行き、使徒たちを連れて来た。

しかし、手荒なことはしなかった。人々に石で打ち殺されるのを恐れたからである。

27.彼らが使徒たちを連れて来て議会の中に立たせると、大祭司は使徒たちを問いただして、

28.言った。

「あの名によって教えてはならないときびしく命じておいたのに、何ということだ。

エルサレム中にあなたがたの教えを広めてしまい、

そのうえ、あの人の血の責任をわれわれに負わせようとしているではないか。」

λέγων,

[Οὐ] παραγγελία παρηγγελίλαμεν ὑμῖν μὴ διδάσκειν ἐπὶ τῷ ὀνόματι τούτῳ,

aor. command

give (strict) orders, instruct, give instructions

καὶ ἰδοὺ πεπληρώκατε τὴν Ἱερουσαλήμ τῆς διδασχῆς ὑμῶν

πληρόω pf. (心が)奪われる、

成就する、いっぱいにする、満たす、実現する、(時が)満ちる、経つ、埋める、(香り、悲しみ、喜びが)いっぱいになる、

(1) *make full, fill (up) completely* (AC 2.2); pass. *become full, be filled with* (MT 13.48);

(AC 13.52) (LU 2.40)(PH 1.11) abs. *be well supplied* (PH 4.18);

(2) of a set span of time *complete, reach an end, fill (up)*; only pass. in the NT *be fulfilled* (MK 1.15);

(3) of foreknown laws, promises, prophecies, predictions, purposes *fulfill*;

(a) act. *bring to fulfillment, give true meaning to* (AC 3.18); (b) predom. pass. *be fulfilled* (MT 1.22);

(4) as fulfilling commandments, duties, demands; in the NT, only w. ref. to the will of God

*carry out, perform, accomplish* (CO 4.17);

(5) as bringing an activity to completion *finish, bring to an end, complete* (LU 7.1; AC 12.25).

καὶ βούλεσθε ἐπαγαγεῖν ἐφ' ἡμᾶς τὸ αἷμα τοῦ ἀνθρώπου τούτου.

29 . ペテロをはじめ使徒たちは答えて言った。

「人に従うより、神に従うべきです。

ἀποκριθεὶς δὲ Πέτρος καὶ οἱ ἀπόστολοι εἶπαν,

Πειθαρχεῖν δεῖ θεῷ μᾶλλον ἢ ἀνθρώποις.

πειθαρχέω inf. pr. necessary

*obey one in authority; gener. follow advice, listen to (AC 27.21).*

30 . 私たちの先祖の神は、あなたがたが十字架にかけて殺したイエスを、よみがえらせたのです。

31 . そして神は、イスラエルに悔い改めと罪の赦しを与えるために、  
このイエスを君とし、救い主として、ご自分の右に上げられました。

32 . 私たちはそのことの証人です。

神がご自分に従う者たちにお与えになった聖霊もそのことの証人です。」

## 説教

今日は、「信教の自由を守る日」ですので、  
主に、世俗の権力に対する「抵抗権」の話をしたいと思います。

抵抗ということは、  
私たちキリスト者が、  
この世に於いて自らの信仰告白を貫いて生きていく時に、  
中でも公の権力との関わりに於いてどうしても考えざるを得ない問題です。  
なぜなら、この世の権力は、黙っていればどんどんと高慢が膨れ上がり、  
遂には神の座を要求して私たちの魂をも支配しようとするようになるからです。

今日のテキストを見てみましょう。  
初代教会の宣教の戦いの場面です。

初代教会は、聖霊が弟子たちに降って後、爆発的に拡大しました。  
最初は120人だけが集まって礼拝していましたが、  
聖霊が弟子たちに降るや弟子たちの数は一挙に3000人に増え(2:41)、  
さらには男だけでも5000人を数えるに至り(4:4)、  
その上「主を信じる者は男も女もますます増えて」いきます(5:14)。

しかも、弟子の数が増えるだけではありませんでした。  
教会の交わりに(加わりたかったけれども)敢えて加わろうとしなかった人々も、  
教会と使徒たちを「尊敬し(=原意は『偉大視する』で、ほめたたえ、激賞するの意)」(5:13)、  
遂にはほとんどカリスマ的な英雄と見なすようになって、  
「ペテロが通りかかる時にはせめてその影でも、だれかにかかるようにするほどになった」(5:15)のでした。  
それで、使徒たちの教えは「エルサレムの町中をいっぱいにする」(5:28 直訳)に至ります。  
教会はユダの首都エルサレムで最もホットでメジャーな存在になったのです。

そこで、大祭司始め権力者たちは妬みに燃えて立ち上がり、  
自分たちの権力に物言わせて使徒たちを逮捕し留置場に入れます。  
ところが、夜、主の使いが牢の戸を開いて彼らを釈放し、  
「行って宮の中に立ち、人々にこのいのちのことは、ことごとく語りなさい。」と言います。  
力づけられた使徒たちは、夜明け頃再び神殿に入って教え始めたため  
再び逮捕され最高議会に立たされて、既に出されていた説教禁止令(4:18)を確認させられます。  
「あの名によって語ってはならないと厳しく命じておいたのに、何ということだ。  
エルサレム中にあなたがたの教えを広めてしまい、  
その上、あの人の血の責任を我々に負わせようとしているではないか。」(5:28)

これに対して使徒たちは答えます。  
「人に従うより、神に従うべきです。」(29)

本来、世俗の権力というものは、  
私たちの外的な生活、  
つまり目に見える私たちの「からだと財、社会生活、外的なこと」に関わる部分のみに関わるものである。  
ですから、私たちの霊的な信仰の領域を支配することはできません。

それなのに、歴史を見ると、  
この世の権力は黙っていれば高慢が膨れ上がり、遂には神のように私たちの魂をも支配しようとしてきました。  
古代社会に於いては皇帝崇拜を強要し、  
宗教改革の時代には(マイセン、バイエル、国境地方等に於いて)  
「新約聖書を役人に引き渡せ」と「新約聖書の引き渡し」を命じてカトリックの教えを強要し、  
近代に於いては神社参拝を強制することによって、国家権力は私たちの信仰を支配しようとしてきました。

私たちキリスト者は、国家を無視するものではなく、むしろ国家を認め、尊重し、できる限り協力します。  
私たちの主イエスキリストは

「カイザルのものはカイザルに、  
神のものは神に返しなさい。」(マタイ 22:21)と言い、  
万物の支配者なる神さまにすべての栄光を帰すべきことを教えてはいるものの、  
しかしその中でも「カイザルのものはカイザルに」と「カイザル」の領域をはっきりと認めています。  
それで、主イエスさまご自身もローマに税金を納められました。

使徒パウロも

「すべての人は上に立つ権威に従うべきである」(ローマ 13:1)と教えて世俗の権力への服従を説きました。  
そして、自らも世俗の法を重んじて生活しました。

宗教改革者ルターは、

「神さまが悪魔に対抗するものとしてお立てになった三つの支配」として  
「家庭」、「教会」に並ぶ組織として、「国家」というものを考えました。

これは、人の墮落を抑制して、

人が自分の思うまま、好き勝手、やりたい放題に不法を働き、

あるいは人を殺すことのないようにという墮落抑制の装置としての国家という意味です。

同じく宗教改革者カルヴァンも、  
国家を、神さまが起こし給うた正当な秩序であり、  
結婚のように創造の秩序から生じたものではないが、  
人間の墮落を抑止する為に神が起こし給う、所謂「一般恩恵」として理解しました。

このような聖書のみことばと伝統的な教会の立場から、  
私たちは、できる限り世俗の権力を認め、尊重し、協力し、税金を納め、法に従います。

でも、それは世俗の権力が神さまの命令に背くことを命じない限りに於いてです。  
もしも俗権が神さまの命令に背くことを命じる場合には、  
私たちは、使徒ペテロの説いた「人間に従うよりは、神に従うべきである」(5:29)との原則に従わなければなりません。  
例えば、  
世俗の権力が不義の戦争を始めたり、  
不遜にも私たちの信仰の領域に干渉する場合には、私たちキリスト者はこれに抵抗しなければなりません。  
そうでなければ、私たちは、この世にへつらうあまり、神さまの怒りを受けて滅びることでしょう。

マルティン・ルターは、  
1526年に書いた「軍人もまた救われるか」という文の中で、  
権力者が不義の戦争を始めた時に軍人たちがどうすべきかを述べています。  
「第二の問いは『もし私の主人が不正の戦いをしたなら、どうか』である。

答え。

もし、彼が不正であることをあなたが知っていたなら、

使徒行伝 5章 29節にあるように、

あなたは人よりも神を恐れ、神に従うべきであり、戦ってはならず、仕えてはならない。

なぜなら、その時あなたは、神に対して安んじた良心を持つことができないからである。

...神は神ご自身のために、

父や母を捨てることを求めたもうのであるから、当然、神のためには主人をも捨てねばならない。」

こうして、権力者によるあらゆる迫害を耐え忍んで従軍拒否をするよう勧めます。

また、同じように、キリストを信じる信仰に関しても、

「この世の権力が、誤って魂に律法を与えようとするなら、

それは神の統治を侵し、魂を誤り導き、破滅させるだけである」と、

権力が信仰や魂を統治することはできないと言い、次のように言います。

「カイザルは魂を教えたり、導いたり、殺したり、生かしたり、つないだり、

解いたり、さばいたり、判決を下したり、捕らえたり、釈放したりなどできない。

もしカイザルが魂に命じたり、律法を課したりする権力を持ってでもいたならば、そういうこともあったに違いない。

しかし、そのようなことを彼は、からだに財宝と誉れとに対してすべきである。

なぜなら、そのようなことは彼の権力のうちにあるからである。」

「ところで、あなたの君候やこの世の領主が、  
教皇の側につけたとか、これこれしかじかの通りに信ぜよとか、  
あなたのある本を捨てよとか命じたならば、あなたは次のように言うべきである。

『ご主人さま。

私はからだと財とをもってあなたに従う義務がございます。

どうか地上に於けるあなたの権力のはかりに応じて私にお命じください。

そうすれば私は従います。

だが、私に信ぜよとか、本を捨てよとか命じなさいならば、私は従いません。

なぜなら、その時、あなたは暴君となり、

高すぎることに手を出して、あなたが権利も権威も持っていないことを命じておられるからです。』」

私たちが神さまからいただいた「信仰」は神聖不可侵なものです。

神さまから直接いただいたのですから、

国からもったり許可してもらったりして

信仰を持っているわけではありませんから、

当然のこととして神さま以外にこれを支配できません。

教会は、霊的には完全に国家から独立した独立王国なのです。

ですから、世俗の権力が教会に対して霊的な事柄について干渉しようとするなら、

教会は「さがれ、サタン！人間に従うよりは、神に従うべきである」と言ってこれを退けます。

そして、教会は、

世俗の権力から独立を保ちつつも、

同時に世俗の権力に対して預言をしなければなりません。

つまり、教会は、

神さまから委ねられている霊的な剣である神のことばをもって、積極的に俗権に助言し、警告を発し、教育するのです。

そうやって教会は国家に奉仕して、

神のみことばの支配するキリストの王国を地上に実現しなければなりません。

これが、国家に対する教会の唯一の責任です。

それは、国家に向かって神のことばを語るという預言の責任です。

預言者としての役割です。

それで、エリヤもエリシャも時の権力者に向かって神のことばを語りました。

イザヤもエレミヤも神のことばを語りました。

イエスさまも神のことばを語りました。

バプテスマのヨハネも神のことばを語りました。

そして、使徒たちも、神のことばを語ったのです。

あらゆる迫害に耐えて、神のことばを語りました。

いのちを賭けて、神のことばを語ったのです。

**「人に従うより、神に従うべきです。」** (29)

彼らは権力から迫害されても語ることをやめませんでした。

結局、使徒たちはこの後も語り続けます。

**「人に従うより、神に従うべきです。」** (29)

使徒たちとして、世俗のことに關しては世俗の権力に従いました。

それで、法律も守ったし、税金も納めました。

でも、靈的なことに關しては、つまり自分たちのキリストを信じる信仰に關しては、人に従うよりも神に従ったのです。なぜなら、彼らを救いへと召したのは神さまであるからです。

主イエスキリストが彼らと呼ばれたからです。

彼らの信仰は神さまがくださいました。

だから、その信仰は神さま以外に介入することのできない神聖不可侵な絶対的なものです。

差し止めるなら、神さましか差し止めることができません。

人はそれに指一本触れることができないのです。

ここでは、使徒たちは「**あの名によって教えてはならない**」と公の場で説教することを禁じられました。

でも、説教することは私たちの主イエスキリストのご命令です。

主イエスキリストは言われました。

**「全世界に出て行き、すべての造られた者に福音を宣べ伝えよ。」**

だから、それをイエスさまが止めると言われれば彼らもやめざるを得ません。

でも、イエスさまが「宣べ伝えよ」と命じておられる以上、

イエスさま以外の誰が何と言っても、妨害しても、禁じても、彼らの宣教を誰も止めることはできないのです。

私たちも同じではないでしょうか。

私たちの信仰も、それを表現する宣教の使命も、イエスさまがくださったものです。

だから、イエスさま以外に、この世の誰もこれを差し止めることはできません。

キリストを信じるなど、私たちの信仰を差し止める権利は誰にもありません。

日本国憲法で個人の「信教の自由」は保障されていますが、

この世の法律で定められていようがいまいが、そんなことは関係ありません。

今の憲法では保障されているが、明治憲法下では制限付きだったから、信教の自由も制限されるというものではありません。

個人の信教の自由、私たちがキリスト信じる自由は、神さまがくださったものです。

人からもらったものではありません。

人から許可してもらって、有り難くその権利を頂戴しているものでもありません。

私たちのイエスさまを信じる権利（宣教の権利）は神さまからのものです。

絶対的なものです。

神聖不可侵なものです。

誰もこれを止められません。

家の主人も、自分の親も、会社の上司も、

学校の校長も、教育委員会も、都知事も、首相も、最高裁の長官も、誰もこれを妨害できません。

もしも誰かが私たちの信仰と宣教を妨害するのなら、私たちがはっきりと彼らに教えてあげなければなりません。

**「人に従うより、神に従うべきです。」** (29)

公権力が私たちに何某かの宗教を強制する際には、私たちがはっきりと彼らに教えてあげなければなりません。

## 「人に従うより、神に従うべきです。」(29)

今日、午後に映画を見る朱基徹牧師は、今日のテキストと同様に説教禁止令を受けました。

三回目の拘束の時のことです。

神社参拝を決議する第28回長老教総会を目前にした1939年8月日曜日、

警察隊は礼拝堂を包囲して「今日から説教するな！」と朱基徹牧師に説教することを禁じました。

すると、その際、朱牧師はこう答えました。

「私は説教権を神さまから受けたので、神さまがやめるとおっしゃればやめるであろう。

しかし、私の説教権は警察から受けたものではないので、警察署がやめると言えるはずがない。」

「説教をやめなきゃ逮捕する。」という脅迫に

「説教することは私のつとめで、逮捕することは警察のつとめだ。私は私の務めを果たす。」と答えます。

「大日本帝国警察官の命令に従わんというのか！」

しかし朱牧師はこう言い返したのです。

「その日本の憲法が礼拝の自由を許可したのだ。

あなたがたは今礼拝妨害、憲法違反をしているではないか。」

このように、神のことばを説教する権限は絶対不可侵で国家権力も干渉できないと朱牧師は宣言しました。

教会は世俗の国家と並ぶ霊的な独立王国なのです。

つまり、教会は世俗のことでは世俗の権力に従うが、信仰のことでは世俗の命令に従えないというのです。

この意味で教会は世俗の権力から完全に独立しているのです。

そして、「説教することは私のつとめで、逮捕することは警察のつとめだ。私は私のつとめを果たす。」と言います。

つまり、教会は国家からの独立と自由を保ちつつ、「神から与えられた自分の責任を果たす」のです。

「神から与えられた自分の責任」とは何でしょうか？

それがすなわち神のことばを語る「説教」です。

教会は国家からの独立と自由を保ちつつ、国家に向かって神のことばを語り続けます。

そして、これが国家に対する教会の本質的責任だと言うのです。

教会は、国家からの独立を保ちつつ、

同時に委ねられた霊的な剣、即ち神のことばをもって、

積極的に俗権に助言し、警告を発し、俗権に神のことばを教育するのです。

「大日本帝国警察官の命令に従わんというのか！」との警察官の怒号に対し

「その日本の憲法が礼拝の自由を許可したのだ。

あなたがたは今礼拝妨害、憲法違反をしているではないか。」と言う時、

朱牧師は教会に対する俗権の責任と義務を教育していたのです。

神に立てられた「預言者」として、

「預言者」の権威をもって「一死覚悟」して

妥協せずに神のことばを語る、そこに国家に対する教会の責任があると朱牧師は考えました。

悪魔が最も恐れるのは、神のことばです。

真実を語ることです。

偶像を拝む世にあっては「偶像を拝んではならない」という神のことばであり、戦争の最中にあっては「殺してはならない」という、極めて当たり前の、私たちが普段聖書から読み聞いている神のことばです。この神のことばが語られることに悪魔は震え上がるのです。そして、その口を封じることに全力を注ぐのです。そうでなければ、つまりそんなに恐れる必要がなければ、別にそんなにまでして拷問を加えて殺す必要などありません。どうしてそこまでやる必要があるのか、その理由はそれだけ真理が語られるということが怖いからです。

日本では、キリスト教の異端である燈台社の信者が兵役拒否をしました。彼らは「殺してはならない。」と教えられた聖書の教えを単純実直に実行したのです。そのひとり村本一生が一旦軍隊に入隊しながらも良心の呵責に耐えかねて「私の銃はお返しします」と内務班の班長に申告して兵役拒否の意思を明らかにした時、（本人はその場で殺される目に遭うと思って覚悟していたら）それを聞いた班長の方が恐怖に包まれて真っ青になり、怯えた目で黙って村本の表情を窺ったそうです。班長もどうしていいかわからず小隊長に報告したら小隊長も困って、営倉送りになりましたが、「村本一等兵は銃の返納を申し出て軍務を放棄したので営倉へ送られる」という報告を聞いた内務班の二百人あまりの内務班の兵は一斉に電撃に撃たれたように立ち上がり、しーんと静まりかえってこわばった表情で村本を見つめたそうです。結局、翌日、憲兵隊に引き渡されて拷問を受け、「不敬・抗命罪」で懲役二年の判決を受けることになりませんが、憲兵の取り調べでしきりに憲兵が気にしたのは「他の兵隊に兵役拒否について話さなかったか」ということだったそうです。戦争一色の中で、「汝、殺すなかれ」と聖書に書いてあるから兵役拒否を申し出る人間がいるという事実は、一般の人々にも権力者にとっても衝撃的な事実です。ましてやそれを人々の集まる公の場で説教するということならば、それは大きな影響をもたらします。

朱基徹牧師も、神社参拝に反対する説教さえしなければ、朱基徹牧師自身が神社参拝しなくてもいいという妥協案まで警察は提案していました。つまり、語りさえしなければ、あとは何をやってもいいというわけです。黙って沈黙していれば赦してやると言うのです。それほど真実が語られるということは権力にとって怖いことなのです。

だから、私たちは語るべきです。

**「人に従うより、神に従うべきです。」** (29)

人を恐れてはいけません。

真実を語ることで私たちはこの罪の世に神の栄光をあらわすことができます。

そして、打たれても、迫害されても、時には殺されても

妥協することなく真実を語り続けるということで、この罪の世に神のことばの絶対なることを証言することができます。



そうして、私たちが迫害する者もしない者も等しく、  
私たちを通して神のことばを聞き、知らされ、その神のことばがこの罪の世に小さな芽を出し、葉を茂らせ、  
花を咲かせ、実を結び、それがいつか太い大木となってこの地に豊かな実りと憩いと祝福をもたらすものとなります。  
この罪の世が神のことば中心に展開していくことになります。

だから、私たちは揺らいではいけません。

どっしりとみことばを信頼し、みことばに立って、みことばを行い、みことばを宣べ伝えなければなりません。

そうして、世界の「祝福の基」とならなければなりません。

世界の「祝福の基」とは、私たちキリスト者、教会が中心となって人々が神さまの祝福にあずかっていくという意味です。

私たちが世俗の間をブラブラとさまよってはいけません。

この世の人々みんなが

私たちのように生きて神さまに喜ばれ、神さまに祝福されるような生き方をまず私たちが生きなければならないのです。

神さまに忌み嫌われて神さまに呪われるような生き方をしてはなりません。

### 「人に従うより、神に従うべきです。」(29)

人を恐れず、ただ神さまだけを畏れ、

あらゆる艱難を耐え忍んで主の御意志を忠実に全うしたいと願います。

そして、この地に、生きとし生けるすべての者が膝をかがめるべき神の栄光をあらわして生きていかれるよう祈ります。